



## ■主な内容

- ・オンライン併用講演会報告  
「建築家・中原暢子とその建築」を聞いて
- ・特集：能登地震 - 震災地支援の模索 -  
能登で初めての「どこでもカフェ」  
被災の前と後のつながり
- ・惜別・石川和代さん
- ・会員参加の本 - 1×1 参加の本「先端の  
バリアフリー環境」  
- 「大学的埼玉ガイド」

10月5日の田鶴浜コミュニティセンターで開催した被災地支援のお茶カフェでは、住宅再建に関する相談も受け付け、実際に現地を見て学生も交え話を聞いた  
(右端が相談者)

写真撮影：平野正秀



## 「建築家・中原暢子とその建築」を聞いて Learning about Architect Nobuko Nakahara and Her Architecture 薄井 温子 USUI Haruko



講師：小川圭子氏

2024年11月24日(日)、東京家政学院大学准教授・小川圭子氏をお招きし、生活構造研究所にて、8名の出席、オンラインで21名の参加で講演会が開かれた。小川氏は、東京家政学院大学家政学部住居学科卒業し、2020年から同大学現代生活学部生活デザイン学科の准教授である。2021年博士に。この研究をするきっかけは、学部2年に中原の住宅設計論・構法計画を、また最終講義「木造設計図集の出版にあたって」を受講したことだった。

### 資料入手の経緯

中原は1929年埼玉県浦和市に生まれ、1948年東京家政専門学校卒業後「住」を目指し、武蔵工業大学短期大学部へ進む。その後東京大学池辺研究室に入所、そこで「立体最小限住宅」に関わる。池辺の助言によりPODOKOに参加し、1958年林・山田・中原設計同人を設立した。2002年設計同人解散、2008年逝去した。自邸(1985年築)取壊しのため、図面や茶道関連の遺品が、東京家政学院大学に譲渡され、研究が続けられている。総作品数142件中25件が発表され、その約6割が現存し、この中の浦和市・長覚院浄泰寺(1961年築)は2021年DOCOMOMO JAPANに選ばれた。

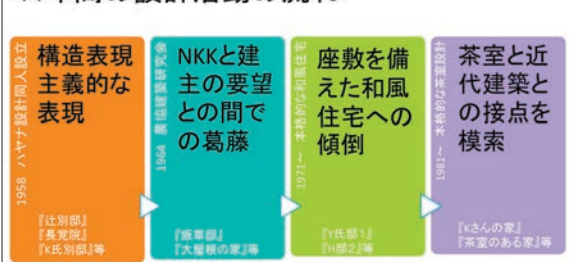
### 44年間の設計活動の流れ

小川氏は、設計同人時代の44年間に設計された中原の作品を4期に分け、建築誌掲載の作品を中心に話をされた(下図左参照)。我々が見学した「毛呂山の家(K氏別邸)」は室内の柱が無い大胆な構造で、第1期の構造表現主義的な表現にあたる。第2期は農協建築研究会NKKに林、山田と参加し、近代的な農村住宅の提案や相談を行った。中原は客が家族の中に入ってくる接客空間を提案したが、二間続きにこだわる施主達との葛藤があったようだ。第3期は座敷を備えた和風住宅へ傾倒し、第4期ではUIFA JAPONで見学した浦和の自邸(1985年築)のように、茶室をもつ住宅設計がみられる。終わりに『建て主の個性を基礎に』と題した中原の言葉で締めくくられた。「・・・しかし、私はそんなにがんばるつもりはない。建て主の考え方に妥協しようと思わないが、私自身が建て主の考え方に共鳴でき、そして非常にスムーズな協力体制ができた時のみ、良い住宅はできあがることだと思っている。・・・」(住宅建築1976年6月号より)

### 講演会を聞いて

1980年代の僅か4年設計同人に在職したが、数年後中原先生から「あなた二級建築士を受けてみたら？」と言われたことが建築士になるきっかけだった。今回の講義で、戦後の新しい住まいをつくりながらも、日本の家とは何か問い続けた先生の姿を知った。

### 44年間の設計活動の流れ



講演会資料より



毛呂山の家の木構造フレーム模型 (写真：小川圭子)

能登で初めての「どこでもカフェ」  
First Dokodemo Cafe in Noto

森田 美紀  
MORITA Miki

10月4日（金）～5日（土）能登で初めての「どこでもカフェ」を開催した。

能登半島地震においては、支援の仕方を探ってきたが、賛助会員の平野（正）さんを中心とする現地調査の報告会を7月20日と8月31日に行き、その2回目の時に10/4～6の予定で「どこでもカフェ」を開催する調整が付きそうだということだった。その場で参加者数人の手が上がり、急遽行うことになった。

少し時間もあったので、チラシを作成して現地で事前に配る、交通費や宿泊費の負担はあるが、UIFA JAPONの会員にも広く呼び掛ける、ということになった。

参加者はUIFA JAPON とその関係者8人（上田（壽）、伊藤、薄井、松川、宮本、朝倉、篠原、森田）復興まちづくり研究会から2人（平野（正）、千葉）、東大グループは6人（筒井、西内、渡辺、高見澤、上本、尹）の計16人。

10月4日（金）午前11時半、七尾市役所で全員の顔が揃った。七尾市長の茶谷氏を表敬訪問し、UIFA

JAPON で集めたお金を、水害で被災された方々の役に立てて欲しいと手渡した。市長から七尾市の抱える問題や、震災からの復興のアイデアについて模索しているという話を聞いた。

昼食後、午後2時半から得源寺にて「寺カフェ+どこでもカフェ」のコラボ開催「お茶カフェ」が始まった。久しぶりの「寺カフェ」であることと、事前にチラシを配るなどの広報活動も功を奏したのか、当初数人・・・と思われていたお客様は19人と大盛況だった。東大グループには設営準備の他に「接客・傾聴」という役割分担をお願いしたが、さすが・・・彼らは自分たちは何をすべきなのかを瞬時に判断し、即座に動きはじめていた。カフェの雰囲気盛り上げ、お客様と共に笑い、話を聞いて、時には自分の考えを述べている。お客様も若い人たち（多分、お孫さんくらい）との会話を楽しんでいる。夕方に副住職に案内され、田鶴浜地区の被災状況を確認した。倒れてしまっている電柱、傾いたゴミ置場、建具の町としても有名だった田鶴浜地区に影をおとしている。

翌日は田鶴浜地区コミュニティセンターで開催した。お客様は多くはなかったが、近くの仮設にお住まいで、家の再建を検討している方や、自治会長の奥様や自治会長がみえた。金沢工大の学生さん7人と先生の計8人もみえて、北陸建築学生仮設住宅環境支援プロジェクト「GAPPA」という活動を大学の垣根を越えて連携で行っていると聞いた。「GAPPA」は、方言で「がんばれ」という意味らしい。

これからの若い力に頼もしさを覚えた2日間だった。今回も多くの方にお世話になった。感謝を申し上げたい。

11月9日に第三回の報告会を行い、次回以降の活動について検討する。



七尾市田鶴浜では、まだ倒壊した建物が放置されている状態があるのが衝撃だった  
(撮影：平野正秀)



田鶴浜町第一団地のコンテナ型仮設住宅  
(撮影：平野正秀)



七尾・徳源寺での寺カフェ+どこでもカフェでは「久しぶりネ」の会話と孫世代の学生との会話が花が咲いた  
(撮影：平野正秀)

## 被災の前と後のつながり

## Connections before and after the disaster

10月4、5日にUIFA JAPONの「どこでもカフェ」に同行した。私の他参加した学生との間で共通の認識が二つあった。「地域に密着しているお寺は強い」と、「何人か見つけられたキーパーソンが地域のために動いていけるかが大事」ということだ。

得源寺では震災前から月に一度ほど茶和会が行われており、今回の「カフェ」にも顔なじみとして参加している方が多かった。5日の仮設住宅横のコミュニティセンターでの人の集まりが少なく感じられたことと比較すると、普段から地域住民に交流の場を提供してきたお寺に、被災後もそのまま集うことができることの効用が痛感された。

得源寺の住職さんと息子さんは二人とも地域について精通しており、住民の方と綿密に関わってきた。5日のコミュニティセンターで会った自治会長ご夫婦も、地域の方々に詳しく快活な二人だった。こうした方々がキーパーソンとして地域復興を引っ張っていくために、「どこでもカフェ」などの支援は良いきっかけとして働くのだろう。

また、実際に被害にあったお宅の状況の確認に同行し

上本 詩織（東京大学 4年）

UEMOTO Shiori（senior at the University of Tokyo）

たこともあり、家のどこでどう生活していたかといったことがよくわかって無念だった。広い住宅に入っていたモノが仮設住宅には収まらずやむなく手放しているという話もあり、災害時に元の生活がつまった家やモノを残していくやり方を考えたいと思う。



得源寺のカフェの様子 背中が見えているバンダナを首に巻いている女性が、執筆者の上本さん（撮影：宮本伸子）

## 惜別 In Memorium

## 石川和代さんを偲んで

## Remembering ISHIKAWA Kazuyo

永くUIFA JAPONの広報委員として活動されていた石川和代さんが2023年2月19日にお亡くなりになった。台東区の「住まい・建築・区施設整備」に勤め、一時東京都に出向し地域の街づくりなどに取り組んでいた。コロナ前、終電で帰る日常をポツツと語る頑張り屋さんだった。青山のウィメンズプラザでの編集会議後、道路向こうの小田和正の後援会に立ち寄る熱心な「追っかけ」だったことも懐かしく思い出す。謹んでご冥福をお祈りしたい。（広報編集部）

しなやかで凛とした和代さんと父上が重なって、  
石川和代さんを偲び 正宗 量子

和代さんの訃報は、世界中がコロナ禍で、UIFAの国際会議もなく停滞気味の世相だったのか、しずかに長い間私達は知り得なかった。とても残念だがお別れをしなければならぬ。

和代さんは、UIFA JAPONのニュースレター第56号発行の頃から広報係として活躍され、台東区では、街づくり構想に携わり建築確認審査から講演までこなす一時都庁で建築行政の仕事をするなど、内剛外柔で芯が強く、優しさとしなやかさが長い髪の姿に滲み出していた。

私は、和代さんのご両親とはUIFAを通し、接点が彼女より強かったような気がしている。そう思える程柔和



2007年10月UIFA プカレスト大会（ルーマニア）後エクスカーションにて



2009年1月新宿の思い出横丁のトイレ改修を小林純子会員の案内で広報編集メンバーとして見学（写真：共に井出幸子）

で紳士の都庁でご活躍だったお父様には、影に日向にUIFA JAPONの為に、どれほどご尽力頂いたか、感謝にたえないのだ。特に1998年に開催したUIFA第12回日本大会では、開会式、清澄庭園での閉会式と茶会では、日本の伝統と美意識を世界に示す事ができた。この会は、都の強い協力と援助無くして成功はなかった感謝の気持ちを再びここに綴りたい。都の荒川沿いの0メートル地帯に、今日も市民の安全を確保する為、スーパー堤防を造った輝かしい功績は、彼の伊勢湾台風に見舞われた経験と強い人間愛に他ならない。

トゥルーズ大会後のスウェーデン行きや、2003年の日本支部設立10周年の伊勢神宮参拝時も、和代さんご家族と共に過ごした思い出が甦り、悲しみはいつまでも消えない。

UIFA JAPON 事務局

〒102-0083

東京都千代田区麹町 2-5-4

第2 押田ビル (株)生活構造研究所内

Phone: 03-5275-7861 Fax: 03-5275-7866

E-mail: uifa@liql.co.jp

URL: http://uifa-japon.com

発行 2024 年 12 月 25 日

THE SECRETARIAT OF UIFA JAPON

c/o LABORATORY FOR INNOVATORS  
OF QUANTITY OF LIFE  
DAINI-OSHIDA BLDG.  
2-5-4, KOUJIMACHI,CHIYODA-KU  
TOKYO, JAPAN 〒102-0083

PHONE :+81-3-5275-7861  
FAX :+81-3-5275-7866  
URL :http://uifa-japon.com

会員参加の本

1×1 参加の本『先端のバリアフリー環境 カリフォルニアにみるまちづくり』【共著】 小池 和子  
1×1 Participation Book “Cutting-Edge Barrier-Free Environments: Community Development in California”  
KOIKE Kazuko



(撮影：上田浩二)

本書は、アクセシブルな生活をめざす、自立生活を支援する活動の扉になった本であり、バリアフリー環境整備の実践の参考書である。

1994 年 3 月、私は日本建築学会ハンディキャプト小委員会(当時主査:小川信子先生)が企画し、車いすの川内美彦氏のコーディネートで、最も先駆的な障がい者の自立生活運動、バリアフリー環境整備地区のカリフォルニア視察に参加した。カルフォルニア州は、1990 年の「障がいを持つアメリカ人法 (ADA)」が制定されるまで基礎的な役割を果たした地域で、自立生活センター創設者で人工呼吸器をつけた故エドワード・ロバーツ氏、車いすのリチャード・スカップ氏や学生、行政の方々の協力で、カルフォルニア州のバリアフリー環境整備について直接学ぶことができた。そのことをまとめた本書は、法制度・統合教育・自立生活運動・公共施設・公園レクリエーション施設・住宅・交通施設等で構成され、私は、故山田初江先生・有馬正子さんと「住宅」を担当。日本と異なり住戸内は元々段差は無く、移動や動作、操作を容易にする工夫(スロープや段差解消機、通路幅や広さ、水回り、扉や情報機器等)を体験した。30 年経った今、住宅改修コーディネーターとして実践中である。



中央法規出版株式会社  
1996 年 7 月 10 日発行

『大学的埼玉ガイドーこだわりの歩き方』から新しい「埼玉学」を発信 宮本 伸子  
New Release: “Specialized Guide to Exploring Saitama”  
MIYAMOTO Nobuko

私の所属するものづくり大学が初めて一般向けに出版する書籍である。

各県をテーマとしたガイドブックはいくつかあるが、ただの旅ガイドや歴史ガイドだけではなく、「大学的」とついても固いばかりではなく、それでもきちんとした根拠に基づく知識やこれからのに向けた考え方などが詰まっている。

全体をまとめた井坂康志教授は大学の英名をつけた P・F・ドラッカーの研究者であり、ドラッカー学会の共同代表、そして新しい「埼玉学」の提唱者である。そして、本書の著者、登場者として 20 名以上を取りまとめた、つわもの編集者である。

私はその中の一人として、埼玉の災害について執筆した。原点は UIFA JAPON の「災害復興見守りチーム」の一人として被災地支援に参加し、「自然災害に備えて一住まいづくりの勘どころ」で、災害を体系的に整理したところにある。埼玉県は災害特性を踏まえて、これから考えるべきことにも触れてみた。

他の著者のところにも、それぞれの方(元県庁、銀行、新聞社等々、現スポーツ、音楽等の専門家と大学教職員)の個性とこだわりのあふれる文章をお楽しみいただけたと思う。

書名：大学的埼玉ガイドー  
こだわりの歩き方  
編集：ものづくり大学教養  
教育センター  
(教授：井坂康志)  
出版社：株式会社昭和堂  
定価：2,750 円(消費税共)



役員会報告

2024 年度第 5 回 9 月 13 日 オンライン会議 1×1 記念誌編集報告 首都防災ウィーク「防災カフェ」開催報告 能登支援調査報告および能登での「どこでもカフェ」準備 オンライン講演会準備 源流研活動報告 Web 交流会準備 NL128・129 号編集報告

2024 年度第 6 回 11 月 15 日 1×1 記念誌編集報告 能登「どこでもカフェ」報告会報告 小川圭子氏オンライン講演会準備 ミニニュース送付アンケート調査報告 この指とまれ企画準備報告 NL128 発行・発送報告 NL129 号編集報告

編集委員からひとこと

夏過ぎて秋無くすぐに冬の気候変動(薄井) / クリスマニア自転車が行き交う 12 年ぶりのコペンハーゲンは、更に魅力的なまちづくりが進行中だった(井出) / 久しぶりに書いた書籍の文章は言い足りないことばかりなり(宮本) / 航空機事故や能登地震で始まった 2024 年、来年はよい年に!(牛山) / 「如意輪観世音菩薩」に魅せられ斑鳩の里へリフレッシュの旅(平野・副編集長) / 今年もせわしない 1 年が終わりますが、部屋の整理整頓は来年に持ち越しになりそうです(杉原・編集長)